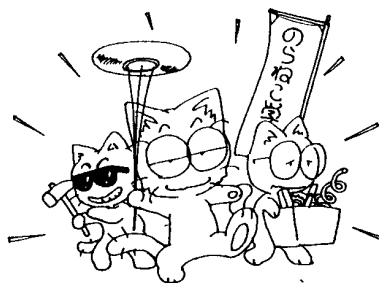


# 『ちょっと元気』なのらねこ学会 大阪夏の陣

科教協 第43回全国研究大会（大阪大会）に今井・小野・五島・加藤・松尾・村田の6人で参加してきた。サークルの最も古いメンバー、小川・長野・石川の3人はアメリカのAAPTの集會に参加で不在。

この3人を欠いて大丈夫かしらん、という不安もあったのだけど、「ま、なんとかなるでしょ」という、いつものお気楽な気分で岐阜を出発した。



## ■ 今井さんと僕は同じクラスだったのか？

大阪へ向かう車中で今井さんがこんなことを言った。

「横浜物理サークルに、鈴木健夫さんっているでしょ。あの人って、大学の同級生じゃない？」（今井さんと僕は、同じ大学・学部・学科の同級生なのだ）

「えっ、ホント？ 4年生の時、どこの研究室だったの？」

「うーん、それはわかんないけど、名前に記憶があるし、YPCニュースの鈴木さんの文章を読んでもと世代的に近いものを感じるんだよね。」

「うーん、そういえば、そんな気が（昨までの科教協大会で、彼の顔には記憶がある）しないこともないなあ。ところで、今井さんは教養部のとき、どのクラスだった？」（うちの理学部は学科ごとに学生を募集しなかったので、200人くらいがいったんドンと入学したのだ。教養部のクラスも5クラスあった）

「えっ？ 村田さんと同じクラスじゃなかった？」

「あれー？ そうだっけ？」

まったくいいかげんである。僕は、教養部の頃 なんとなく大学に失望感を感じていて、高校時代の仲間とヘンなサークルを作って放蕩していた。「僕たちは何のために生きているのか。」なんてことを語り合っていた。そんなことは、大学の仲間と語り合えばいいんだけど、最初の大学祭（6月上旬）でのクラスの盛り上がりについていけず、クラスの仲間とは一定の距離を置いていた。ほんとに今井さんと同じクラスだったのかな？

## ■ 十数年後の今日、僕たちはあらためて出会い直した

「科学お楽しみ広場」で、鈴木さんが岐阜物理サークルのコーナーにやってきた。おもいきって聞いてみた。彼は突然の問いかけに面食らっていたようだったが、今井さんの記憶は正しかった。僕たち3人は、同じ学び舎の卒業生だったのだ。大学時代、ほとんど言葉も交わしたことのなかった3人が、十数年後にこうしてこんなところで顔を合わせるなんて、この人生もそんなに捨てたもんじゃない。

スネて、無為に過ごした僕の教養部時代を悔いても仕方がないが、あの頃 この2人と語り合うべきことは山ほどあったのかもしれない。まあいい、僕たちは今日こうして新たに出会い直したのだ。

「お楽しみ広場」の商売(?)が忙しくて鈴木さんとは、ろくに話もできなかった。今度お会いしたら、ゆっくりお話ししましょうね。（個人的ことを長々と書いて了る）

個人的なことついでに書くと、岐阜へ帰ってきてから、大学時代の写真や名簿を押し入れから引っ張り出して調べたら、僕と今井さんは教養部時代、本当に同じクラスだったことを発見して僕は愕然とした。そんなことも忘れてる僕はなんて冷たいヤツだ。

### ■『のらねこの挑戦』ナイターは、元気の素!?

さて、ナイターだ。6人の順番と演題(?)だけ決めて、あとは出たとご勝負。ほら、もうお客が集まってきた。よし、トップバッターの加藤さん行け！元落研の加藤さんの軽妙なおしゃべりが、お客の心を一発でつかむ。『樹氷でキンコン』は、ホントに心和むく芸だ。

松尾さんが職人芸の実験装置を紹介しながら、「初めはマネなんです。でも自分で実際に作ってみるとね、マネじゃ終わらないんですね。」とほほ笑む。うーん、いいなあ。そうこうするうちにお客は100人を越えた。



五島さんの『秘伝!ゾウリムシ培養法』、小野さんの身体を張った『人バラ(?)』、今井さんの『ビーチボールの宇宙遊泳』等々、脈絡なく(?) それぞれが一番〈面白い〉と思っていることを紹介しまくる。これが岐阜物理サークルのスタイルだ。

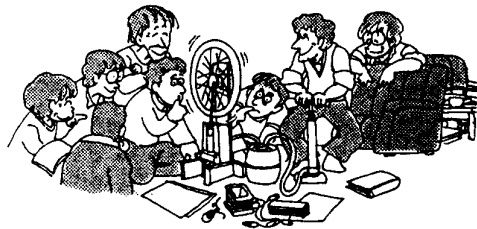
ナイターが終わっても、部屋のあちこちで輪ができて、それぞれの話は尽きない。これがまたいい。

「ナイター速報」用の感想用紙を今井さんが若い女性から直接受け取った。ナイター後も残って、懸命に『皿回し』の練習をしていた彼女だ。

「初任研で疲れていましたが、このナイターに出て、〈遊び〉の中に面白さがいっぱいつまっているのを見て、ちょっと元気になりました。自分でも簡単に作れたストローの笛はとっておいて、いろんな音の高さのものを作ってみようかな? (鯉・雛餅)」今井さんは「〈ちょっと〉ってとこがいいね。〈すごく〉なんていったらウソっぽい。」と言った。その通りだ。でも、その〈ちょっと元気〉がたぶん一番大切なのだ。

次の日に出た「ナイター速報」には、  
「のらねこ学会のアイデア実験集・・・いつも感心してしまう。こんな発想、いつどうしてひねり出すのか極意をうかがいたい。ホントに物理が好きなんだネエー。(棘・訳)」とあった。〈極意〉なんて大層なものはないけど、「自分が興味を持ったことを、同じように面白がって、いっしょに楽しんでくれる仲間がいること」これが決定的に重要だ。

平凡な田舎教師にすぎない僕たちだって、そういう仲間があると、〈ちょっと元気〉が出るのだ。



ナイターの打ち上げで入った安っぽい中華料理屋で、ビールを飲みながら松尾さんがにっこり笑ってこう言った。

「この歳になってもね、この大会に出かける前は子どもみたいにうきうきするんだよ。」ホントだ。科教協大会は、僕たちの元気の素なのだ。(文責 村田)